

はやし なお みち
林 直 道

1923年 大阪市に生まれる
1946年 北野中学をへて大阪商科大学を卒業
現 在 大阪市立大学教授。経済学博士。関西勤労者教育協会副
会長
現住所 兵庫県芦屋市岩園町2の4
主 著 『西田哲学批判』(解放社), 『マックス・ウェーバーの思
想体系』(青木書店), 『景気循環の研究』(三一書房), 『帝
国主義論』(青木書店), 『経済学入門』(汐文社), 『経済学』
下巻(帝国主義の理論)(新日本出版社), 『史的唯物論と
経済学』上・下(大月書店), 『国際通貨危機と世界恐慌』
(大月書店), 『史的唯物論と所有理論』(大月書店)

フランス語版資本論の研究

1975年12月18日第1刷発行
1976年10月20日第2刷発行

定価は函に表示
してあります

著 者 © 林 直 道
発 行 者 小 林 直 衛
印 刷 所 ㈱ 太平印刷社
製 本 所 ㈱ 中條製本工場
発 行 所 株式 会社 大 月 書 店

東京都文京区本郷2-11-9
電話 営業 (813) 4651
編集 (814) 2931
振替東京3-16387

落丁・乱丁本はお取替いたします

フランス語版資本論の研究

林 直 道 著

大月書店

凡 例

一 本書で掲げたフランス語版『資本論』の引用文は、ラシャートル版 (*Le Capital*, par Karl Marx. Traduction de M. J. Roy, entièrement révisée par l'auteur, Paris, Éditions, Maurice Lachatre et Cie, 1872-1875) から訳出して示した。その際、Ⅰ・Ⅱとあるのは、それぞれ、二欄組の左欄・右欄を示している。

一 現行版『資本論』からの引用は、大月書店刊、普及版『資本論』(その翻訳の底本は、Karl Marx-Friedrich Engels: Werke, Bd. 23, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag, Berlin, 1962. である)を用いて示した。その際、①、②とあるのは、分冊番号を示している。(分冊ページは邦訳全集版と同じである。)

一 本書、第一部にある、マルクスおよびエンゲルスの書簡からの引用は、国民文庫版『資本論書簡』を用いて示した。本書にある、引用文中の傍点・は、原文ではイタリック体あるいは隔字体になっている箇所であり、白丸のついている箇所は、著者による強調を示している。

一 なお、訳書を掲げて示した引用文でも、かならずしも訳書の訳文にはしたがっていない。

一 フランス語版『資本論』の引用箇所は、原則として《》またはへんに入れて示した。

一 小活字で示した注(1)、(2)……のなかのへんはフランス語版、矢印の下の「」はそれに対応する現行版の箇所を示している。

なお、現行版は、フランス語版よりも後に刊行されたものであるが、ここでは、フランス語版を現行版と比較し、その異同をあらわすのに、「挿入」「省略」等の表現を用いた。

目 次

凡 例	三
序 文	三

第一部 フランス語版『資本論』の科学的意義

I フランス語版『資本論』の成立事情	三二
〔付記〕 フランス語版『資本論』の各種の版本	三九
II フランス語版『資本論』の特質	三二
一 マルクスによる訳文校閲＝事実上の書直し	三一
二 理論内容の改善と補足	三四
III 現行版『資本論』とフランス語版『資本論』との関係	四〇
一 フランス語版からの採用をふくむマルクスの第三版計画	四〇
二 エンゲルスによる第三、第四版の編集	四二

IV フランス語版『資本論』研究の意義…………… 四

補論 マルクスのフランス語版採用指示箇所と現行版との対比…………… 四

付録1 フランス語版採用指定69箇所と現行版当該箇所との対比表…………… 五

付録2 マルクスの指定箇所中現行版とちがっている部分で、本書第二部に収録のないものの一括紹介…………… 六

第二部 フランス語版『資本論』の独自的内容

——現行版と対比して——

まえおき…………… 七

I 篇別構成における相違点…………… 三

II 理論的叙述の変更と補足…………… 六

第一版序文

1 社会発展を自然史的過程とみる立場…………… 八

第一篇 商品と貨幣

2 商品の二要因。使用価値と交換価値または本来の価値…………… 八

3 個人的使用価値と社会的使用価値…………… 九

4 経済学の回転軸としての労働の二重性…………… 九

5	自然と人間との質料循環の媒介者Ⅱ労働	100
6	単純労働と複雑労働	101
7	労働の二重性への補足	102
8	価値形態論の課題	107
	〔追記〕 マダム・クイックリーについて	109
9	論理的なものと歴史的なもの	111
10	商品の物神的性格	113
11	社会認識は現実の発展と逆に進む	115
12	ブルジョア経済学の基本的性格	116
13	アジア的生産様式	118
14	交換過程にひそむ矛盾とその解決	119
15	いかにして、なぜ、なにによって	127
16	貨幣の魔術	129
17	価値・価格の偏差と生産の無政府性	130
18	貨幣の流通必要量の定式	131
19	本来の意味での貨幣	133
	第二篇 貨幣の資本への転化	
20	資本の歴史的出发点	134
21	自己増殖する価値としての資本	136
22	ここがロードスだ ここで跳べ	138

第三篇 絶対的剰余価値の生産

23	労働過程の一般的考察……………	一四〇
----	-----------------	-----

24	諸労働の金銀生産労働への還元……………	一四二
----	---------------------	-----

第四篇 相対的剰余価値の生産

25	労働強化と相対的剰余価値……………	一四三
----	-------------------	-----

26	独自の資本主義的生産様式……………	一四五
----	-------------------	-----

27	技術学の対象と方法……………	一四六
----	----------------	-----

28	大工業による高度な家族形態の経済的基礎の創出……………	一五〇
----	-----------------------------	-----

29	人間と自然との質料循環の再建、都市と農村との再統一……………	一五三
----	--------------------------------	-----

第五篇 剰余価値の生産にかんする進んだ研究

30	絶対的剰余価値と相対的剰余価値……………	一五四
----	----------------------	-----

31	自然的条件と剰余労働……………	一六〇
----	-----------------	-----

32	剰余価値の源泉とブルジョア経済学……………	一六〇
----	-----------------------	-----

33	将来社会の必要労働と剰余労働、労働日の短縮……………	一六一
----	----------------------------	-----

34	労働力の価値と剰余価値との量的変動……………	一六四
----	------------------------	-----

第六篇 賃 金

35	国民的賃金率における差異……………	一七〇
----	-------------------	-----

第七篇 資本の蓄積（上）

36	資本の蓄積・緒論……………	一七四
----	---------------	-----

37	資本家の雇用財源と本源的蓄積……………	一七五
----	---------------------	-----

38	見えない糸による労働者階級の隷属……………	一七
39	商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転化……………	一七
40	蓄積と貨幣蓄藏と在庫形成との混同……………	一八
41	アダム・スミスのドグマ……………	一八
42	資本家の推進的動機……………	一七
43	社会的労働の生産性と資本蓄積……………	一八
44	いわゆる労働財源……………	一九
	第七篇 資本の蓄積（下）……………	
45	資本構成が不変であれば、蓄積の進展は賃金率を騰貴させる傾向をもつ……………	一七
46	蓄積の進展途上における資本構成の継起的変化、および労働力と交換される資本部分の相対的減少……………	二〇
47	相対的過剰人口または産業予備軍の累進的生産……………	二三
48	相対的過剰人口の存在形態 資本主義的蓄積の一般的法則……………	二三
49	相対的過剰人口の累進的生産の論証について……………	三五
	第八篇 本源的蓄積……………	
50	本源的蓄積の秘密……………	二四
51	本源的蓄積過程の西欧的限定……………	二七
52	農村住民からの土地収奪……………	二八
一	イギリス農奴制の事実上の消滅……………	二九

二	封建領主權力の經濟的基盤	二四九
三	教会領の役割	二五〇
四	ヨーマンリの興亡	二五〇
五	共同地の横領、土地囲いこみ	二五一
六	土地収奪の諸形態	二五三
53	浮浪者取締り判事の階級的性格	二五三
54	本源的蓄積期の賃金立法	二五五
55	資本主義生成期の國家の經濟への干渉の必然性	二五五
56	資本家の借地農業者の生成	二五六
57	仲介代理人の資本家への成り上がり	二五七
58	商業資本の産業資本への転化	二五九
59	本源的蓄積の槓杆としての國家權力	二六五
60	集團的所有と私的所有。二つの私的所有	二六六
61	資本主義的蓄積の歴史的傾向	二六七
補録	フランス語版『資本論』の歴史科学的諸命題	二七三
1	中世の人的從屬關係	二七三
2	共同的労働と家長制的農民經營	二七四
3	原始的共同所有。共有の崩壊と私有の原型	二七四
4	商品交換の歴史的起源	二七五
5	一般的等価物の歴史的実存形態	二七六

6	伝統的な生産様式と貨幣蓄蔵	二七
7	古代社会と貨幣	二八
8	古代世界や封建制の階級闘争と債権・債務	二八
9	資本関係の成立は過去の生産諸形態の破壊の産物	二九
10	奴隷制の経済原則としての鈍重な労働用具の使用	二九
11	社会経済形態と剰余労働の搾取様式	三〇
12	前資本主義社会の金銀生産と過度労働	三一
13	奴隷制、農奴制の野蛮の上へ文明による過度労働の苦痛のつぎ木	三二
14	共同所有の特殊形態を基底とした夫役労働・農奴制の成立	三三
15	協業の歴史的諸形態とその経済的基礎	三四
16	小規模耕作・独立手工業の歴史上の位置	三五
17	製紙業と生産的様式の諸形態	三六
18	自然的諸条件の二つの部類と文化段階	三六
19	現物地代と貨幣地代	三七
20	水の管理と古代アジア国家	三八
21	生産手段の所有形態と剰余労働	三九
22	高地スコットランドの氏族制度。貢租、土地所有	三九
23	近世インドの豪族と農民の貢租	四〇
24	アジアの共同体とアジア国家	四一
25	古アジア的・古代的生产様式。専制主義と奴隷制	四三

序 文

マルクスの『資本論』は、資本主義社会の経済構造を解剖し、その経済的運動法則を明らかにした書物である。商品からはじまって貨幣、資本、剰余価値の本質を解き、蓄積、資本の流通と再生産、剰余価値の利潤・利子・地代への分割をへて諸階級にいたる、その精密で力強い理論の体系は、まさに経済学史上の金字塔とよぶにふさわしく、資本主義分析のための汲めどもつきぬ知識の源泉をなしている。

ところで本書で研究しようとするのは、この『資本論』そのものではなくて、それと一種独特の關係に立つフランス語版『資本論』である。それではいったい、フランス語版『資本論』とは何か？

現在『資本論』の定本とされているいわゆる現行版『資本論』は、エンゲルスの編集にかかるドイツ語第四版を原型としている。これが世界各国語に翻訳され読まれているのであって、わが国で出ている数種類の『資本論』邦訳書もすべてこれである。フランスでもまた現行版『資本論』のフランス語訳が出されている。ところが本書にいうフランス語版『資本論』とは、これとはまったく別個の版であり、内容上きわめて多くのちがいをもった書物なのである。

フランス語版『資本論』は、もともとドイツ語第二版のフランス語への翻訳として生まれた。マルクスは彼自身フランス語にすこぶる堪能であつたが、極度の多忙のために、翻訳はジョゼフ・ロアに依頼し、

その訳稿をマルクスが校閲するという形で仕事がすすめられた。だがロアの訳の出来栄はかんばしくなかったため、マルクスはこれを全面的に書き直し、結局、一から彼自身がフランス語で新著を書きおろしたのとかわらぬ結果となった。こうした念入りの改筆過程において、マルクスは、フランスの読者向きに、叙述平易化のために文章表現に数多くの変更を加えたばかりでなく、さらに、理論内容をより正確・より高度なものに仕上げるという意味での書き替え・書き加えをも随所で行なっていた。ときには一つの章、一つの節全体がごっそり書きあらためられたところもある。このようにしてフランス語版『資本論』は、ドイツ語第二版にくらべて「叙述変更と補足」を無数にふくむ《独自の科学的価値》をもった著作となったのである。そこには、マルクス自身の筆になる最も後年の『資本論』第一巻として、最もすんだマルクスの見解が豊富に盛りこまれているのである。

ところで、それならばフランス語版こそ『資本論』の最高の版であり、現行版にとって代って定本の位置をしめるべきではないのかというに、やはりそうではないのである。第一に、フランス語版では平易化のためにかなりの叙述の簡略化が行なわれており、また文章や用語上の格調という点でもドイツ語版にかなわないからである。第二に、マルクスの死後、エンゲルスの手で『資本論』のドイツ語第三版・第四版が編集・刊行されたが、エンゲルスの説明によれば、このなかに、フランス語版中マルクスが最も重視しドイツ語新版へ採録すべく指定していた箇所が、マルクスの遺志どおり、すでに採録され編入されているのである。したがって、現存する諸版のうちで最も基準的な意義をもつのは、やはり、このドイツ語第四版を原型とした現行版『資本論』ということになるのである。

しかし以上の事実は、フランス語版の価値と、それを研究することの重要性とをすこしも減ずるものではない。なぜならば、フランス語版のうち最重要箇所は現行版のなかへすでに挿入済みであるとはいえ、

それはフランス語版における「叙述変更と補足」の一部分にとどまり、そのほかになお多くのきわめて価値ある叙述が現行版に編入されずに残っているからである。マルクスがフランス語版『資本論』を「独自の科学的価値」ある労作といったのはドイツ語第二版とくらべてのことであつたが、しかしフランス語版は現行版とくらべてもなおかつ「独自の科学的価値」をもつといふことができるのである。

フランス語版のなかには、第一に、資本蓄積の篇をはじめとして、随所に、現行版にない独自の論点の提起や、現行版とちがつた説明方法の展開が見出される。これらの箇所は現行版『資本論』への重要な補足として、マルクス主義経済学体系のなかでしかるべき座席を与えられねばならないものである。

第二に、右の点以外にも、いわば重要命題の異文とよぶべきものが数多く存在する。これにもまた一定の価値がある。なぜなら、もしわれわれが現行版の文章にこのフランス語版異文を重ねあわせて読むならば、あたかも今まで片眼で見ていた物を両眼で見直したとき、当の事物が立体化されて浮き上がってくるのにも似て、『資本論』の諸命題の理解をいちだんと深めるのに役立つからである。「アジア的生産様式」概念の明確化はその代表的一例である。

本書第二部は、フランス語版『資本論』のなかから右に指摘したような箇所を系統的にとりだし、現行版『資本論』のそれぞれの箇所とつきあわせて若干の考察をこころみたまものである。

フランス語版『資本論』は、カウツキーによる民衆版『資本論』の編集のさいにある程度の摂取がなされたが、それ以後、若干の例外（私の知るかぎり、河上肇、長谷部文雄、福井孝治氏など）をのぞいて本格的に研究されることがなかったように思われる。ところが、最近にいたつてにわかに一定の研究の進展が生じた。まずソ連のウローエヴァ女史によるフランス語版『資本論』成立史の綿密な研究が行なわれてきた。またわが国では平田清明氏によるフランス語版の重要性の強調がある。もっとも平田氏の所論は、